

日本國天皇家論

6章 日本書紀 持統天皇

近畿天皇家の始まり

平城京造営と遷都

九州天皇家天武は日本國天皇家に反乱し、勝利して、日本の天皇となり、太宰府で統治した。この時、太宰府は日本の首都だった。天武紀はその史実を記録している。

天武紀の舞台は九州 「京及び畿内」に派遣

・天武5年(676)9月の10日に、王卿を京及び畿内(うちつくに)に遣して、人別の兵を校へしむ。

676年に、天武が「京及び畿内」に王卿を派遣した記事である。「京」とは文字通り「京」である。「畿内」とは大化の改新の詔勅によって定められた、「畿内」である。畿内は、東は名張の横川、南は紀伊の兄山、北は近江の狭狭波の合う坂山、西は赤石の櫛淵」と、東西南北が定められている。「畿内」は大化2年の改新の詔によって定められた近畿二府四県である。「京」とはその都である。この記事は676年、当時に、すでに「京」が存在したことを示している。この「京」とはいかなる京か。藤原京に他ならない。藤原京はこの時、すでに存在していたのである。

天武は「畿内に王卿を派遣した」と日本書紀は記録している。何故、このような表現となったか。天武は、この時、太宰府に居たからである。もし、天武が奈良に居たならば、「畿内に人を派遣した」とは云わない。

大極殿は太宰府

- ・天武10年(681)2月25日に、天皇・皇后、共に大極殿に居しまして、親王・諸王及び諸臣を喚して、詔して曰く、「朕、今より更律令を定め、法令を改めむと欲ふ。故、俱に是の事を修めよ。然も頓に是のみを務に就さば、公事闕くこと有らむ。人を分けて行ふべし」とのたまふ。
- ・天武10年(681)3月17日に、天皇、大極殿に御して、川嶋皇子……大山下平群臣子首に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ。
- ・朱鳥元年(686)の春正月の2日に、大極殿に御して、宴を諸王卿に賜ふ。是の日に、詔して曰はく、「朕、王卿に問ふに、無端事(あとなしこと)を以てす。仍りて對(こた)へて言すに實を得ば、必ず賜ふこと有らむ」とのたまふ。

日本書紀は「大極殿」と書いている。この時代、天武は、筑紫で新羅の国賓を歓待している。天武は九州にいた。そうでなければ、諸外国からの使節を、筑紫(博多)の迎賓館で接待出来るわけがない。天武は筑紫の迎賓館に気軽に出かけることができる所にいた。

天武が居たのは、「大極殿」と記録されている。大極殿とは天子がいる王宮の意味である。九州で大極殿を持つ京とは太宰府である。天武は太宰府の大極殿にいたのである。

畿内に都の造営計画

- ・天武13年(684)2月28日に、浄廣肆廣瀬王・小錦中・大伴連安麻呂、及び判官・録事・陰陽師・工匠等を畿内に遣して、都つくるべき地を視占しめたまふ。
- ・天武14年(685)9月11日に、宮處王・廣瀬王・難波王・竹田王・彌努王を京及び畿内に遣して、各人夫の兵を校へしめたまふ。

この記事も注意深く読まれなければならない。天武は「畿内」に浄廣肆廣瀬王・小錦中・大伴連安麻呂、及び判官・録事・陰陽師・工匠等を派遣して「都つくるべき地」を探させた。ここには「京及び畿内」と書かれている。

この「京」とは藤原京である。天武13年の記事の「都つくる」という記事は、「京、畿内に天武の宮を造ろう」、という記事である。「都」とは「宮處」の意で「京」という意味ではない。天武天皇は、この時、太宰府にいた。そして奈良に遷る準備をしていたのである。

九州天皇家の最初の元号、朱鳥

- ・天武15年(686)7月20日に、元(はじめのとし)を改めて朱鳥元年と曰ふ。偁りて宮を名づけて飛鳥浄御原宮と曰ふ。28日に、浄行者70人を選びて、家出せしむ。乃ち宮中の御宿院に設齋す。

九州天皇家が初めて元号を制定した記事である。それまで元号を制定してきたのは日本國天皇家である。日本國天皇家が日本の支配者だった。ゆえに、元号を制定することができた。天武の代になり、天武は日本國天皇家を倒し、天皇となった。ここで初めて、九州天皇家が元号を定めることとなった。「朱鳥」である。

持統紀の舞台は奈良 「京と畿内」とは奈良と近畿

- ・持統4年(690)3月20日に、京及び畿内との人に、年八十より以上なる者に、嶋宮の稻、人ごとに二十束賜ふ。其の位有る者には、布二端加し賜ふ。

690年、正月に持統は即位した。その3月、京及び畿内の80歳以上の老人に「嶋宮」に貯えていた稻を20束ずつ配っている。「嶋宮」とは草壁皇子がいた九州天皇家の宮である。ところが、草壁は亡くなってしまった。それを契機に持統は九州を去り、日本國の京、藤原京に戻って、即位した。そして、この記事が続く。京とは藤原京である。畿内は近畿である。持統は、即位の祝賀記念として、草壁皇子の宮の稻を80歳以上の老人に配った。「これは、草壁皇子からの贈り物ですよ。」と贈ったのであろう。

- ・持統9年(695)6月3日に、大夫・謁者を遣して、京及び畿内の諸社に詣でて請雨(あまごひ)す。

694年に、持統は藤原宮へ転居した。翌年の記事に、「大夫・謁者を遣して、京及び畿内の諸社に詣でて」とある。ここでも「京及び畿内」が同じように使用されている。持統の個人的な「宮」と「藤原京」を区別した使用法である。持統・藤原の宮と「京及び畿内」とは全く異なる存在である。

藤原宮は奈良

- ・持統4年(690)10月29日、高市皇子、藤原の宮處を觀す。公卿百寮從なり。
- ・持統4年(690)12月12日、天皇、藤原に幸して宮處を觀す。
- ・持統6年(692)5月23日に浄廣肆難波王等を遣わして、藤原の宮處を鎮め祭らしむ。
- ・持統6年(692)6月30日、天皇、藤原の宮處を觀す。
- ・持統7年(693)8月朔に、藤原の宮地に幸す。
- ・持統8年(694)12月6日に、藤原宮に遷り居します。

持統の「藤原の宮」の記事が、690年に、初めて現れる。この記事は、持統の宮を建てるべき場所を觀たというものである。宮の名前は「藤原の宮」である。「藤原の宮」とは京の名前ではない。持統4年の記事は、持統の宮に関するもので、京に関するものではない。持統4年から持統8年の転居までの記事は全て、「藤原宮」に関す

るものである。

「宮」と「京」を混同してはならない。この記事は「持統が藤原京を造った」と混同されている。そして、「藤原京は694年に完成したが、平城京遷都まで短命であった」という解釈されている。

しかし、持統紀の記事はそういうことではない。690年から694年までの4年間は、持統の宮の造営である。その宮は「藤原」という地名の場所に建てられたので、「藤原宮」だったというだけのことである。

「宮」と「京」を混同する解釈が生じる原因は、藤原京という首都を造営した國家・日本國の存在認識がないからである。持統が造営したのは「藤原の宮」である。藤原京ではない。694年の記事は持統が「私邸」を造り終え、転居したことを示す。

持統の「藤原の宮」がどこに存在したか、日本書紀は明らかにしていないが万葉集では明らかである。

藤原宮の御井の歌

52 やすみし わご大王 嵩照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給へて 埴安の堤の上に あり立たし 見し給へば 日本の 青香具山は 日の経の 大御門に 春山と 茂さび立てり 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます 耳成の 青管山は 背面の大御門に 宣しなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 嵩知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそは 常にあらめ 御井の清水

万葉52番歌では、「天の香具山」は「日本乃青香具山」と詠われている。「天」とは九州天皇家の聖地、彦島の弥生国家「天(あま)」である。日本とは日本國天皇家の都である奈良をさす。「藤原宮の御井の歌」を詠った作歌者は不明であるが、歌は正確である。近畿天皇家が国号を「日本」と名乗るのは、701年大宝律令制定からである。「藤原宮の御井の歌」はそれ以前の歌である。この歌の地理は日本國の都、奈良の地理である。持統の藤原の宮は、奈良大和三山の中央に建造された。

新益京は平城京

- ・持統5年(691)10月27日に、使者を遣わして新益京を鎮め祭らしむ。
- ・持統6年(692)春4日に、皇子高市に封を増すこと二千戸、前に通せば五千戸。12日に、天皇、新益京の路を 觀(みそなは)す。

持統5年(691)は地鎮祭の記事である。この地鎮祭は「新益京」のものである。新益京とは「新しく・益す(増す)京」の意で、文字通り、「新しく・益す(増す)・京」を意味する。新しくとは藤原京に替わって新しくという意である。日本國の首都・藤原京に替わって、近畿天皇家の京を新しく造営しようとした。そのために地鎮祭を、691年に行った。

その使者の行き先は書かれていないが、藤原京ではない。藤原京の北、奈良市である。新益京とは平城京である。平城京は近畿天皇家の京だった。新益京への遷都は、持統が地鎮祭を行ってから、19年経った710年、元明によって行われた。

太宰少弐小野老朝臣 328番歌

あをによし 寧樂の京師は 咲く花の 薫ふがごとく 今盛りなり

「寧樂」とは奈良・平城京である。仮に、藤原京が持統が造営した最初の条坊都市だったとしよう。すると、この小野老朝臣の歌は藤原京にこそふさわしい。平城京に先立って明日香の地に最初の条坊都市と大極殿が造営されたにもかかわらず、その京を詠った歌は残されていない。平城京を詠った歌は沢山ある。しかし、平城京は奈良では二番目の京である。すでに藤原京が存在していた。どちらが新鮮で、驚異だったか、言うまでもないであろう。

「乃樂(平城京)」遷都

710年、元明天皇は遷都した。日本書紀は元明遷都については、ごく簡単に伝えるのみである。日本書紀の作成目的は持統紀で終わった。持統天皇によって近畿天皇家が始まる。九州天皇家と日本國天皇家の歴史は、日本書紀28巻の中に融合して記録された。これからは新しい代である。

日本書紀は平城京遷都についてはほとんど記録を残さなかった。注意してやっと見つけることができる。
天智七年春正月三日、皇太子即天皇位す。二月二十三日、古人大兄皇子の女倭姫王を立てて、皇后とす。遂に四の嫁を納る。蘇我山田石川麻呂大臣の女有り。遠智娘と曰ふ。一の男・二の女を生めり。其の一を大田皇女と曰す。其の二を鵜野皇女と曰す。天下を有むるに及びて、飛鳥浄御原宮に居します。後に宮を藤原に移す。其の三を建皇子と曰す。唾にして語ふこと能はず。次に遠智娘の弟有り、姪娘と曰ふ。御名部皇女と阿陪皇女とを生めり。阿陪皇女、天下を有むるに及びて、藤原宮に居します。後に都を乃樂に移す。

わずか最後の一行だけが、「平城遷都」の記事である。「乃樂」とは、平城京である。

万葉集の「寧楽」遷都

万葉集に遷都を歌った元明の歌がある。万葉集に「寧楽宮」という名前が現れるのは、78番歌の題詞である。万葉集では「寧楽宮」と書き、日本書紀は「乃樂」と書く。同じ奈良・平城京である。

寧楽宮に遷りましし時の歌

和銅三年庚戌の春二月、藤原京より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて迺かに古郷を望みて作る歌 78番

飛鳥(とぶとり)の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

藤原京から寧楽宮への遷都の歌である。作歌者は元明天皇。万葉集・第一巻・第二巻には「寧楽」という標目がある。この標目の意味は平城遷都以降ということを示す。その後の歌に登場する地名は現在の関西地名と一致する。藤原京とは明日香で発見された都跡である。ここは日本國の王都だった。持統は即位の後、藤原京に藤原の宮を造営した。その宮から平城京の寧楽宮に遷った時の歌である。

藤原京から平城京へ

日本書紀は日本國の京・藤原京について明確に記録していない。持統の藤原の宮と藤原京を同一視されて、持統が藤原京を造営したと解されている。藤原京は大極殿・朝堂院・内裏が並ぶ1km四方の宮城を中心とした平城京を超える広さの京だった。平城京以前、大極殿・内裏を備えた宮城は、西の太宰府と藤原京だけである。天武が「大極殿」にいたことは日本書紀に書かれている。天武が居た「大極殿」とは太宰府・大極殿である。持統が造営に着手した京は平城京である。710年、始めて近畿天皇家は独自の京を持ったのである。

元明天皇、平城京遷都の歌

元明は藤原京の藤原の宮から平城京に遷った。

万葉78番歌

和銅三年庚戌の春二月、藤原京より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて迺かに古郷を望みて作る歌

飛鳥(とぶとり)の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

藤原京から奈良・寧楽宮への遷都を詠ったのである。この望郷歌の前に二つの歌がある。

(元明)天皇の御製 76番歌

ますらをの 軋の音すなり もののふの 大臣 楯立つらしも

(勇士が弓を射て軋に弦の当たる音が聞こえてくる。将軍が楯を立てて訓練をしているらしい)

御名部皇女の和へ奉る御歌 77番歌

わご大君 物な思ほし 皇神の つぎて賜へる われ無けなくに

(わが大王よ、心配なさいますな。皇祖神が大王に副えて生命を賜った私がおりますのですから。)

日本古典文学大系・萬葉集は「もののふの大臣」と読んでいる。一般名詞で軍事大臣といった意味である。原文は「物部乃大臣」である。これは「もののべの大臣」と読むべきではないか。物部氏は元明政権の第一権力者である。

701年 左大臣正二位 多治比真人嶋が死ぬ
702年 正三位石上朝臣麻呂太宰率師
704年 麻呂右大臣
和銅元年(708) 従二位石上朝臣麻呂に正二位を授ける
右大臣正二位石上朝臣麻呂を左大臣に任じる
和銅3年(710) 平城京遷都
左大臣正二位石上朝臣麻呂藤原京の留守司

元明政権の第一権力者が石上麻呂である。彼は物部氏である。故に76番歌で「楯を立てている大臣」は、石上麻呂を指しているのではないか。従って、「物部乃大臣」は「もののべの大臣」と読むべきであろう。左大臣、物部麻呂である。

元明天皇は何か物思いにふけている。不安なのであろうか。天皇は何故不安なのか。姉の御名部皇女が和へ奉る御歌で「物な思ほし(物莫御念)」と慰めている。「物」は物部をかけているようである。物部氏の事は心配しなくてもいいですよ。このメッセージを込めているようである。

そして、遷都の歌が続く。しかし、物部の石上麻呂は藤原京の留守司である。物部朝臣麻呂は新都、平城京から外されて飛鳥に残された。日本書紀は石上朝臣麻呂が荒れているような書きぶりである。

元明は左大臣石上朝臣麻呂に別れを告げる。

飛鳥(とぶとり)の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

飛ぶ鳥のように明日香の里を置いて飛び立ってきたが、左大臣、あなたの居るあたりはもう見えなくなってしまったわ。

近畿天皇家の代の歌

第一巻の最後に「寧楽宮」という標目がある。そのまま書き出して見よう。

寧楽宮(ならのみや)

長皇子、志貴皇子と佐紀宮に俱に宴する歌 84番歌

秋さらば 今も見るごと 妻恋に 鹿鳴かむ山そ 高野原の上

(秋になったら今見るように妻を恋うて鹿が鳴く山となるであろう。「日本文学大系注」)

歌の題詞にある「佐紀宮」は奈良市佐紀町である。平城京の北に佐紀町がある。もう関西の馴染みの地名に出会うことができる。第二巻の最後には第一巻と同じように「寧楽宮」という標目がある。

寧楽宮(ならのみや)

和銅四年(711)歳次辛亥、河邊宮人、姫島の松原に嬢子の屍を見て悲しび嘆きて作る歌二首 228番歌

妹が名は 千代に流れむ 姫島の子 松が末に 苔むすまで

姫島について頭注は摂津の地名であることは知られるが、その位置には諸説あり、未だ確定しないと解説している。しかし大阪市に住む人にとっては姫島は日常生活に登場する地名である。

大阪市西淀川区に姫島がある。淀川と神崎川の中州・姫島、阪神電車姫島駅がある。この歌の作歌場所も関西である。

229番歌

難波潟 潮干なありそね 沈みにし妹が 光儀を 見まく苦しも

この二つの歌はセットである。難波潟は大阪難波潟である。九州天皇家における難波(浪速)は関門海峡である。ここには潮干はない。干潟があったのは大阪湾である。「姫島」「難波潟」・・・これらは大阪である。

もはや、歴史は九州天皇家の代から近畿天皇家の代に移ってしまった。

